

創業 180 年 今に紡ぐ伝統の美と技

株式会社 川島織物セルコン
川島織物文化館
館長 辻本 憲志

1、はじめに

当社は 1843（天保 14）年に初代川島甚兵衛が京都市内六角室町で呉服悉皆店「上田屋」を創業し、本年 180 年を迎えました。現在は京都洛北の地市原に工場を構え、帯・緞帳・祭礼幕・打掛等の身装・美術工芸事業とカーテン・壁装・椅子張・床材等のインテリア事業の二つの事業を行っております。明治元年に家業を継いだ二代川島甚兵衛が、開国し文明開化・欧化政策の下、生活様式に西洋様式が取り入れられ染織品が本格的に室内装飾品として使用される様になり、その先駆者的な役割を果たしました。以降、時代と共に人々の志向や生活様式の変化に添う最良の形として現代に継承されています。今回はその事例から飛躍的な発展を遂げた明治期を中心に今に継承されている美と技について紹介します。

2. 明治期

二代川島甚兵衛は 1884（明治 17）年に京都西陣に「川島織場」を竣工し主に縮緬等の実用織物の製織を開始し、一応の成果を収めた後に豪華絢爛な西陣織に本腰を入れ「美術織物」の製作を始め 1885（明治 18）年に東京で開催された五品共進会（五品：陶器、漆器、絹織物、生糸、繭）に空引機で織り上げた紋織掛軸「本極織 葵祭之図」を出品し、翌年海外視察の機会を得ました。現地で西欧建築内に使用されている織物の調査を行い、西陣織を改良し室内装飾に使用できる様にすれば生活様式が西洋化する国内で一大事業となることを確信しました。またフランスで豊かな美術表現力・装飾性を兼ね備えた「ゴブラン織」のタペストリーを見てその織技法が日本の綴織とほとんど大差のないことに着目し改良発展させればゴブラン織よりはるかに価値ある綴織の作品が間違いなく出来ると考え、当時細々と小さなものを中心に織られていた綴織の織技術・機などを改良し大作を続々と発表し後に「綴織再興の祖」と世に認めさせる事と成りました。

1888（明治 21）年の明治宮殿造営に際し室内装飾織物を納めたのが契機と成り、翌年には絹織物で空間を飾る国内初となる純日本式室内装飾を紹介する施設を京都三条高倉に洋館「川島織物参考館」（図 1）を建設しました。特にその壁面には、横幅 3 メートルを超える大作を製織できるように織機を改良設計し、複数の職人が横に並んで一斉に織るための技術改良をもした大機で尾形光琳原画を綴織で製作した織物「光琳四季草花」（H206cm×W395cm）、「光琳流水」（H206cm×W345cm）の二張が使用され、内外の賓客、商工業家にその斬新さと優雅さを賞賛されました。



図 1. 川島織物参考館内観

翌 1890（明治 23）年東京で開催された第 3 回内国勸業博覧会に綴織壁掛「犬追物」を出品したのを初め、1893（明治 26）年シカゴ万国博覧会では綴織壁掛「日光祭礼」（大賞受賞）を、1895（明治 28）年に京都で開催された第 4 回内国勸業博覧会では綴織額「悲母観音」（妙技一等受賞・明治天皇陛下お買い上げ）の出品のみならず玉座の装飾をも請け負いました。綴織額「悲母観音」は、百年後の 1994（平成 6）年に技術継承とその検証を目的に再び製作しました。

1900（明治 33）年の第 5 回パリ万国博覧会には綴織で日本画の繊細な表現をした壁掛「武具曝涼」とフランスでの開催であることを十分意識し素材にウールを用いてゴブラン織風に織り上げた油絵調表現の壁掛「群犬」の両極端な二つのタイプを出品し名誉大賞を受賞しました。この博覧会で、単品の装飾品である壁掛だけでなく日本式の室内装飾を完成させひと部屋全てを提案する必要性を実感し、自国の優れた織物や調度品・工芸品で統一した日本独自の室内装飾様式いわゆる「日本式スタイル」を試行錯誤のうえ発表したのが 1904（明治 37）年のセントルイス万国博覧会に出展した「若冲の間」（図 2）と「網代の間」です。特に「若冲の間」は宮内省御物「動植採絵」（原画 伊藤若冲）の模写の許しを特別に得て製織した綴織パネル 10 枚で壁面を設えました。日本人が西洋の室内装飾をよく理解したと名誉大賞を受賞しました。



図 2. 「若沖の間」内観



図 3. 室内装飾透視図「百花百鳥の間」

翌 1905 (明治 38) 年のリエージュ万国博覧会には四季の花鳥風景を表現した「百花百鳥の間」を出品し名誉大賞を受賞、終了後その内 2 点は明治宮殿東溜の間に飾られました。

3. 大正期

ネオ・バロック様式の本格的西洋風宮殿として明治 42 年に創建された旧東宮御所（現 迎賓館赤坂離宮）の建築に伴い、カーテンなどの室内装飾織物や 1913 (大正 2) 年には綴織壁飾「武士山狩」を納め、昭和 49 年の現在の迎賓館施設への大改装時には、「主要部分は極力元通りの姿に維持・復元する」とされた基本方針に従い織物の調査を行い多種多様な室内装飾織物を製作しました。

海外で現在も使用されている貴重な織物である、オランダハーグ平和宮 2 階大会議室の壁面 9 面を飾る綴織「晩春初夏百花百鳥」は、約 5 年の年月を掛けて製作し 1913 (大正 2) 年に納めました。その出来栄えからその大会議室は「日本の間」と呼ばれています。

4. 昭和・平成、そして今に

1967 (昭和 42) 年の昭和宮殿造営時には、豊明殿の壁面を飾る綴織「豊幡雲」大小合わせて 30 面（総面積 271.7 m²）を 4 年の年月を掛けて製作したのを始め 64 種類の室内装飾織物を納めました。本事業を契機として、1884 (明治 17) 年に東堀川元誓願寺に建設した工場を 1964 (昭和 39) 年に現在の地、京都洛北の地市原に工場を移転しました。

途絶えていた万国博覧会への出品も、1970 (昭和 45) 年開催大阪万国博覧会で直径 4 メールの円形綴織タペストリー（意匠 イサム・ノグチ）と巖島神社蔵能装束「紅地鳳凰桜雪持笹文唐織」を復元し行いました。

以降、明治期より培われてきた技術・知見は現代では、正倉院宝物裂地の復元模造（1993 年～2004 年にかけて 19 点）や大きな織物としては劇場を飾る緞帳（図 4）、精巧緻密な織物として帯・祭礼幕等に間違いなく継承されおり、また新たな織物の表現にも取り組み、イタリアミラノデザインウィーク（図 5）等へも出品を行い世界への発信も始めています。



図 4. 緞帳大機



図参考. 綴織手元



図 5. 緞帳（ミラノデザインウィーク）